

F-10 縫製・調理における技術能力の形成に関する要因(第一報)

お茶の水女子大附属高

武藤ハ惠子

目的 家庭科教育の場における縫製及び調理技術について、その形成にかかる要因を調べるため、巧みな生徒と巧みでない生徒の縫製・調理に対する好み、意欲、幼児経験、小・中学校の経験、性格特性及び教師の評価観点での違いを調査した。またこの結果とともに縫製と調理の技術評価における違いを検討した。

方法 家政科課程の都立高校五校の2年及び3年生(約800人)の中から各校各学年毎に縫製及び調理技術に巧みな生徒、巧みでない生徒5名ずつ選出し(各群50名)担当教師による評価と、生徒に対してアンケート調査及びY G性格検査(高校生用)を実施し、検討した。

結果 縫製に巧みな生徒は巧みでない生徒に比べて、好み、好みの変化の時期、10才以前のししゅう・編みものの等の経験、幼少期から器用であるといわれていた。小中学校時の図工の評価などに有意差があり、Y G性格検査ではA型(平均型)が多い。巧みでない生徒はR(のんきさ)S(社会的外向)などの因子レベルが大きく、特に嫌いで巧みでない生徒は情緒的不安定因子が高い。調理に巧みな生徒は巧みでない生徒に比べて10才以前の台所の手伝い、体育の好みなどに、性格ではD型(安定積極型)に有意差があった。性格特性はSにやや高い他はあまり差が認められない。教師による評価の観点は縫製では正確さ、まじめな態度、ていねいさについて多くあがり、調理ではていねいさ、能率、まじめな態度についてが多かった。評価の観点の違い毎に先行経験、性格特性の相関を比べると、その関連性があるものとないものが認められた。